

都市空間と人間

間宮 陽介

京都大学大学院人間・環境学研究科教授

1

建築家の槇文彦氏が、日本には、少なくとも戦前の日本には「広場」の概念がなかった、「広場」という言葉さえ、子供の頃はほとんど耳にすることがなかった、と書いている（『記憶の形象』）。たしかに、戦後になっても、そしてわれわれの生きている現代においても、言葉はともかくとして、広場なるものを生き生きとした姿で思い浮かべることができない。日比谷公園は公園であって広場ではない。町中の児童公園もそうである。

「ああ、これが広場だったのだ」と、「広場」を体感するのはヨーロッパの古い町を訪れたときである。小さな町にも不釣り合いなほど立派な教会があつて、その前が広場になっている。朝になるとあたり一面が市場となり、野菜、パン、ソーセージ、花卉などを商う移動店舗がひしめき合う。昼過ぎになると、ビールやワインを飲むオープン・カフェが店舗にとって替わる。

まみや ようすけ

1948年生。東京大学大学院経済学研究科卒。神奈川県川崎大学助教授等を経て現職。専攻は社会経済学。主要著書に『市場社会の思想史』『丸山真男』『増補ケインズとハイエク——“自由”の変容』他多数

日が暮れる頃には、広場は陽気な社交場と化しているのである。広場にはもう一つ、小路や街路の変形したものがある。たとえば、狭い街路があるところでふくらみをもち、人の流れがそこで停滞する。あるいは、小路と小路が交差するところにも同じふくらみができる。これらはいわばミニ広場といってもいいもので、教会前の広場に比べるともっと親密な空間となっている。

広場というものは必ずしも空き地ではない。原っぱに円を描いて出来上がったものを広場というのではない。われわれに広場の観念が乏しいのは、裏を返すと、われわれが広場を広い空き地くらいにしか考えないからである。このような自然の広場と異なり、ヨーロッパの広場は「人間の意志によってつくられた人工的な空間」（槇、同上）である。原っぱに円を描いてここを広場にすると宣言すれば、この広場もまた人間の意志によって作られたと言えそうだが、そんなことではない。意志によって作るとは、人間の意志で「外部空間」を作るということである。つまり広場が存在しなければ都市の空間は内部空間の集積にすぎなくなる。カプセルホテルを一個の都市に見立てれば、このような内部空間だけから成る都市を想像することができるであろう。宿泊客＝住民はカプセルという密室に閉じこもり、相互に行き来することも、何事かを共同で決定することもない。このような都市は都市としては欠陥があるから、人間は意志によって（必ずしも権力の手でということではない）私的領域



フライブルク市の教会前広場（筆者写す）

の外側に外部空間を作ろうとしたのである。

だから、(ヨーロッパの)広場は、例外なく、建物によって取り囲まれている。街路の変形たるミニ広場はもちろん、教会前広場も、教会のほか、商館、市庁舎などの建物によって囲まれている。建物の内部空間は相対的に閉じた私的人格の強い空間であるのに対し、外部空間としての広場は相対的に開いた空間、公共的性格の強い空間である。原っぱ広場と違って、ヨーロッパの広場は内部と外部、公と私の二つの空間の緊張関係の上に形成されたものである。都市が内部空間に偏重すれば、都市はカプセルホテルのような都市になる。一方、外部空間に偏重すれば、都市は例えば、「ファシズム空間」のような都市になるであろう。ここでは、私的な内部空間は極度に縮小している。家庭内のひそひそ話でさえ、監視カメラ（密告）で外部に筒抜けになるのである。

2

ところで、「広場」の概念がない、あるいは乏しいということは、「都市」の概念がない、あるいは乏しいと

いうことと、同じことだと思う。政治家や学者が「市民から庶民へ」などとたまうとき、彼らは自分たちの頭に都市の概念が存在しないことをみずから露呈している。それだけならまだ無害だが、都市の概念がないところへ都市再生を行おうとするから、悲劇が生まれる。彼らによって作られる都市は都市というよりむしろ非都市である。彼らの都市再生は都市を再生するのが目的なのではなく、土地をできるだけ効率的に活用すること、すなわち土地再生が第一の目的だからである。実際、「市民から庶民へ」を提唱している中曽根元首相は首相在任中、アーバン・ルネッサンスを唱え、山手線の内側を五階以上の建物で埋め尽くすことを夢想し、この夢を実現すべく容積率の緩和を含む都市の規制緩和を行おうとした。もしもこの計画が現実のものになっていたら、東京は巨大な非都市に変貌していたであろうし、同時に、市民も庶民へと変質していたであろう。

比較的稠密に人びとが生活を送っているところ——これは都市の最大公約数的な定義であろう。人が住めば住居やオフィスなどの建物が必要になるから、都市には建物もまた比較的稠密に存在してい

る、という系が導かれる。また人が住めば、彼らは何事かを行うだろうから、政治、経済、文化などの活動が比較的集中して行われるところが都市だ、という定義が導かれることにもなる。これらの活動はさらにいっそうの活動を呼ぶから、都市はしだいに拡張し、東京、ニューヨーク、ロンドンなどのメガロポリスが生まれる。都市が規模を拡張させていくと当然土地は狭隘になる。そのため、郊外への都市の外延化がすすむとともに、中心部では土地の「効率的」活用が図られ、建物の高層化による都市の垂直化が進行する。いずれの場合にも交通問題が深刻化するから、こんどは高速道路や高速鉄道などの交通網が都市を網の目のように覆っていく。都市問題は行き着くところ土地問題となり、政官業が都市作りの主役となっていくのである。

なるほど土地問題や交通問題も都市問題の一つであろう。山手線の内側を高層化し、都内に高速道路を縦横に貫徹させれば、土地問題や交通問題は解決するかもしれない。だが都市問題はたぶん解決しないだろう。なぜなら、このときには「都市」そのものが消失してしまうかもしれないからである。

解決すべき対象自体が消失するというのは、なにも都市に限ったことではない。たとえば教育もその一例であろう。小泉内閣は大学の「国際競争力」を高めるために大学改革を推し進め、その一環として国立大学の法人化を断行した。この大学自由化政策によって国立大学法人はみずから債券を発行して必要な資金を調達することができるようになった。株式会社形態の子会社を設立することも可能となり、現に子会社をもっている旧国立大学もある。そのうえ、私立大学も国立大学法人も経営の効率化を図るために大学間での合併を行ったり、教員に費用節約の励行を求めている。また少子化にともなう大学間競争の激化に対応して、宣伝、広告などの活動に大学挙げて取り組むようになった。電車広告はいまではオープンキャンパスや入試情報を満載する大学の宣伝広告に主役の座を奪われた感がある。このようなもろの「大学改革」の結果は、大学の改革というより、

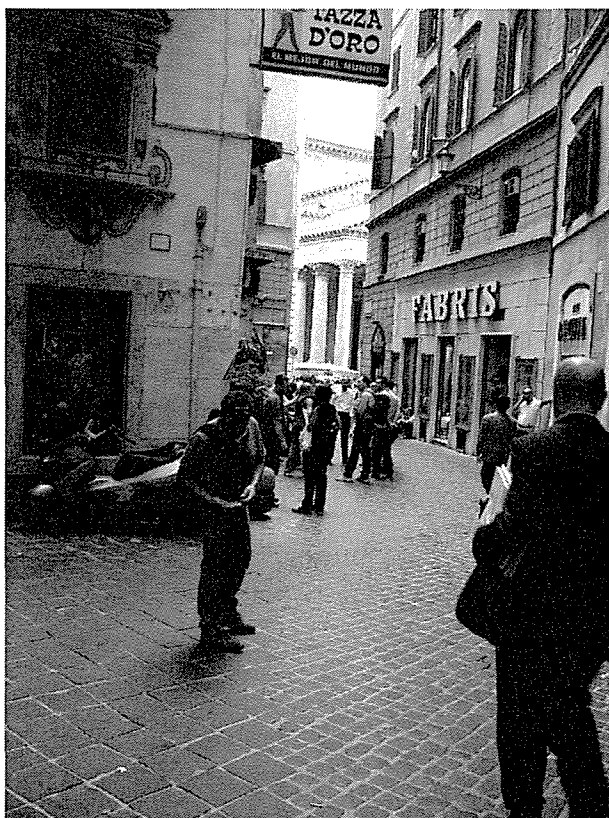
むしろ「大学」の消失である。大学がしだいにビジネス企業と化すのと裏腹に、教育研究活動の場としての大学は先細りしていくのである。

安倍内閣の教育再生も同様であろう。いじめ、学内暴力、自殺、学力低下などの教育問題を解決すべく、教育再生会議はさまざまな改革を提言している。いじめる子供の登校を拒否すれば、あるいはゆとり教育を詰め込み教育にすれば、あるいは教員免許を更新制にすれば、短期的にはいじめは減り、学力は向上するかもしれない。だが彼らはその見返りとして教育を消失させようとしている。赤子を湯水とともに洗い流す愚をおかそうとしているのである。

株式会社大学がなぜうまくいかないのか、株式会社病院がなぜうまくいかないのか。同様に政官業によって作られる都市（株式会社都市とでも言うておこう）がなぜうまくいかないのか。改革論者のために言うておくと、彼らは教育や医療や都市を破壊しようと思つて改革を推進しようとしているわけではないだろう。さまざまな問題があり、これらの問題を解決しようとして彼らは改革に乗り出した。だが彼らの頭には問題の東はあつても、教育とは何か、都市とは何か、という問いかけがない。だから、いじめが起これば、「いじめは止めましょう」「命を大切にしましょう」「いじめる子どもを眼前から消し去りましょう」という対症療法的な発想になる。たしかにその効果は絶大であろう。ために、いじめはいいか悪いかを問う試験問題を出したとせよ。いじめる子を含め、百人中百人がいじめは悪いと答えるであろう。

3

まったく同様のことが都市についても言えるだろう。土地不足を解決するために住居の高層化を実現させたとして。たしかに土地問題の解決の一助にはなるかもしれない。だがそれにともなつて別種の問題が発生するかもしれない。昨年(2006年)3月、川崎市の高層マンションの最上階から小学生が投げ落とされ殺害されるという事件が起こつたが、この



小路が交差するところに広場（ローマにて筆者写す）

事件は高層マンションの特性と無関係ではない。一般に犯罪は人目のないところで起こる。犯罪をなくすには人目を増やすことが基本であって、人目を増やすには防犯カメラ以上に町を活気であふれさせることが根本である。ところが高層マンションには構造上、死角が多い。都市の安全に関する理論家で実践家でもあるオスカー・ニューマンによれば、高層集合住宅（13～30階建て）での犯罪発生率は低層集合住宅（3階建て）に比べると2倍以上である（*Creating Defensible Space*, 1996）。しかもそこでは、犯罪の半数以上が、エレベーターや通路などの屋内公共施設（interior public space）で発生している。昇降エレベーターはともすれば「密室の街路」となりやすいし、通路は最上階ともなればほとんど人目はない。誰でも（外部の人間でさえ）利用できるという意味で、これらの施設はパブリックなのだが、人目を欠くことに

よって、犯罪の格好の場所となる。川崎市の事件でも、この人目のないところを犯人は殺害現場に選んだのである。

このように、都市の経済効率化を促進すれば、都市の安全や子どもの健やかな成長にむしろ負の影響を与える。だから監視カメラを、というのが為政者の発想だが、そうなることとは市民のプライバシーを侵害する。プライバシー侵害があれば次の一手を、というふうに、都市はしだいに規制や監視のかたまりになっていく。安倍内閣の規範意識の強調は決して自由社会の「法の支配」（the Rule of Law）の強調ではなく、ルールを統治の手段とすること、江戸時代の御触書による庶民統制がそうであったように、「法治国家」（Rechtsstaat）を強化し、国家による市民統制を強めようとする企てにほかならない。

都市について考えるということは、都市を経済効率

化しビジネスの手段とすればどのような影響が人びとに及ぶか（もちろんこれだけではないが）、その委細を考えるとということである。そのためには、漠然とではあっても、都市についての観念をもたざるをえない。食べ過ぎで胃の調子がおかしくなれば、われわれは節制するなどして体調を整えることができる。しかし都市の病理の場合には、われわれはその原因をよく知らない。きらびやかで目くるめくような超近代都市の背後で、この病理はそれと知らず進行する。病理という意識があればまだ手の打ちようがあるけれども、ふつうは病理の意識すらもないであろう。山手線の内側を高層化するという政治家に都市の病理の意識があるとはとても思われない。

私は昨今の教育問題や子どものいじめや自殺の問題でさえ都市の病理の一環だと考えている（たとえば私の「教育の場としての都市」宇沢弘文他編『都市のルネッサンスを求めて 2』所収、を参照）。なぜなら、これらの問題は子どもを含め、人びとの生活に関わることだからである。生活するとは「住む」ということ、住むということは人間の空間との関わり方を意味する。だからわれわれはなにを措いても、都市とは何か、空間とは何かを、問わざるをえないのである。

4

ここに至って、冒頭の広場が関わりをもってくる。広場は人間の意志によって作られたというのが本当なら、都市も人間の意志によって作られたものかもしれない。さらに都市の住民である「市民」も人間の意志の所産とっていいかもしれない。「市民から庶民へ」というスローガンは、私には「広場から原っぱへ」という言い方と同等に聞こえる。そもそも市民と庶民は背反的な存在ではなく、前者は庶民という（自然の）存在に付加され意志されて形成されたところの存在ではないか。広場が意志されて形成された外部空間だとしたら、都市もまた意志されて形成された外部空間とってよい。ただしこの外部空間は内部空間と一対になった外部空間である。両空間の

関係はどうなっていなければならないか。都市とは、内部空間と外部空間の関係を空間的に構成したものとと言えるかもしれない。

注意すべきは、内部空間、外部空間といってもただ一つの内部空間、ただ一つの外部空間を意味しているわけではない、ということである。内部空間を私的空間、外部空間を公共的空間と言い換えることも可能だが、その場合、公と私は二極として対峙するのではない。「私」の極限はおそらく人間の心の奥底、「公」の極限はたぶん国家であろうが、これら両極のあいだにはさまざまなウェイトで混じり合った半公、半私領域が存在するであろう。これら無限のヴァリエーションをもつ中間領域こそが都市の生命だと私は考える。1972年に市当局によって爆破されたセントルイスのブルーイット・アイゴー団地は犯罪の巣窟となった超近代的な集合住宅団地であったが、爆破を余儀なくされるほど荒廃した原因は公的領域と私的領域があまりにも截然と分離されたところにあった。建物内の通路も、建物周辺も、ここでは住戸＝私的領域の余白にすぎず、ほとんど空間が分節化されていなかった。建物の入り口周辺が半私的な性格を有しておれば、犯罪者に侵入への抵抗感を与えたであろうが、そうなつてはいなかった。

私の住んでいる京都もそうだし、ヨーロッパをはじめとする外国の古い町もそうだが、これらの都市は、公と私のヴァリエーションが実に多彩である。街路にしても住居や店舗が面する細い路地から数段階に幅を変えて大通りに至るようになっている。当然、住居外の外部空間も親密なものからパブリックなものまで、多様に分節化されている。このような多段階にわたる外部空間の存在が子どもの成長に好ましいはたらきをしていることは指摘するまでもないだろう。ちなみに京都は、明治に入って日本で最初の学区制の小学校を作ったところであるが、この制度を作ったのは町衆という「市民」たちであった。■